

ダンス授業の有効性に関する実証的研究

天理大学 塚本 順子

1. はじめに

「現代人は自分の身体に無頓着で、身体を使ったり、知的、情緒的、社会的そして精神的要求にさえも役立てることができず、また道具として身体を鑑賞する力も無い。」(North 1987) という現状は日本にもいえることであろう。

日々目まぐるしく変化する社会状況において、多くの心身の問題が派生し、コミュニケーション形態もますます複雑化している。柔軟で豊かなコミュニケーション能力を育むことは、私たちが成熟した社会を築いていく上で不可欠であり、「身」に働きかける教育が今こそ必要であるといえる。

「身体動作は人間の感情表出の核として働き、何ものをも介せず感情をじかに伝え合う媒体として人と人をつなぐ生活と芸術の根源の働きをなしている。」(松本1964) ものであり、これまで教育の中では創作ダンス等が実践され、その成果も実証されてきた。また、平成11年の学習指導要領の改訂により、その学習内容は多種多様に広がったといえる。

しかし、実際に多くの素晴らしい実践が展開されても、内容の拡大による渾然とした状況からは、具体的なダンスの学習内容及び指導法や成果を掴みきれないことから、筆者はこれまで体育指導者養成におけるダンス授業という視点から、その機能を明らかにし、有効な実践に繋げることを試みてきた。

本研究では、先の研究で明らかにした学習者による評価シートからとらえたダンス授業の6因子<①ダンスと自己②教師の指導行動③表現・伝達④コミュニケーション⑤ダンスへの態度⑥動きの意味>のうち、教師の指導行動に着目し、それがどのような働きをなした結果、成果として表れるのかを検証することを試みる。

2. 研究方法

(1) 単元過程でみた教師の指導行動と学習者の振り返りの記述の分析

単元過程の中で、具体的にどのように指導にあたったのかを、教材、授業のねらい、指導行動の3点から分析し、学習者の振り返りの記述をKJ法で分析したものとを照らし合わせながらその成果との関わりを検証した。

(2) 対象

対象は2005年度のスポーツ方法1(ダンス)A/Bの受講者72名の受講した授業(90分×13回)である。それらは「総合的に判断して満足できる授業であったか」の質問に5段階評定で回答を求めた結果、それぞれその平均値がAクラス4.46、Bクラス4.58であった。

3. 結果および考察

(1) 単元過程でみた教師の指導行動

資料参照

(2) 毎時間での学習者の振り返りの記述

資料参照

4. まとめ

(1) 1・2・3回目の授業

授業のねらいは、心もからだも固定観念を払拭し、精一杯動くこととリラックスさせること、自分や他者のからだに気付き動くことを意識させること、教材に遊びの要素を含みつつ他者と自然に関わらせること、またそこに意外性や発見を盛り込み、興味を持たせること等である。

学習者は、学習に意欲的でダンス・表現への気づき、他者の感性や発想への発見があり、踊る楽しさや爽快感を感じているが、恥ずかしさや緊張、不安を抱えている。

教師の指導行動は、自分や他者に気付かせたり認めたりする言葉がけを心掛け、身近で取組みやすい教材を選定し、一緒に動き、1人や2人、グループで等々々関わり場を設定した。

(2) 4・5・6・7・8回目の授業

授業のねらいは、ダンスや動きの要素を、動きながら現象としてからだでダイレクトに捉えさせ、1時間毎に、動きの要素(時性・力性・空間性)から動きと感情の関係、空間構成、作品の運びへと、課題を漸次的に進めることである。

学習者は、踊ることの楽しさを感じ、他者の発想や表現に感動しながらも、創作するという課題に難しいと苦戦し、最終的には自分たちなりの表現に繋がったことに満足している。しかし、表現したいものと自分の身体や動きとのギャップに難しさを感じている。

教師の指導行動は、個性を認め、発想・着眼点の良い点をタイミングよく拾い上げ、ほめる指導を実践しながら、行き詰まっているものについては、何を表現したいかを明確化させ、自分たちなりの表現を目指すように指導した。

(3) 9・10・11回目の授業

授業のねらいは、自分たちらしい作品を作り、完成させることである。

学習者は前向きに取り組もうとしつつも、不安や焦りの中で、作品を作り上げていくことを難しいと感じている。

教師の指導行動は、全てのグループに目を配り、進捗状況が思わしくないグループには目指す表現の明確化を促した。

(4) 12・13回目の授業

学習者は仲間と自分たちの表現を貫いたことに満足し、ダンスの素晴らしさに気付いている。また、最終的には表現のズレを感じていた自分自身の表現も、好意的に受け止めている。